

## 人形劇のまち飯田

～「交流と協働」「創造」を核にしたさらなる展開～

長野県飯田市 平沢 真一



### 1. はじめに

飯田市は、長野県の南部に位置し、東に南アルプス、西に中央アルプスがそびえる豊かな自然とすぐれた景観、四季の変化に富んだ南信州の中心市にあたる。りんご並木と人形劇のまちとして広く知られているが、近年ではグリーンツーリズムの取り組みや、環境モデル都市への指定、定住自立圏の締結など、先進的な取り組みが進められており、多くの学生が飯田の地域を題材にフィールドスタディに訪れるなど、他の地域から研究対象として注目を浴びる地域ともなっている。また、交通の面では、2027年にリニア中央新幹線開通に伴う飯田駅設置と、愛知・静岡・長野を結ぶ三遠南信自動車道の開通を見据えており、利便性の向上を生かしつつ、世界に通じる地方都市となるべく、「小さな世界都市」の実現を目指している。

一方で、中山間地域を含む当地域においても高齢化や核家族化が確実に進行しており、それに伴って個人化が進み、地域のつながりの希薄化が大きな問題ともなってきている。

今レポートを通じ、飯田市において長年にわたり取り組まれてきた人形劇を通じたまちづくりについて考察し、現状の成果と課題を明確にしつつ、新たに「交流と協働」「創造」を核に、①「ヨソモノ」「外の力」の活用、②アーティスト⇄劇人による創造活動の展開、③学校教育を通じた子ども達の創造性の育み、④アーティストと子ども達との交流・協働の4点を提言し、あわせて、「世代をつなぐ」取り組みとして、⑤次代を担う若年の世代の「場所」づくりを提言していくことで、より地域に活力が生まれ、地域が豊かになるための方法を模索する(図1)。

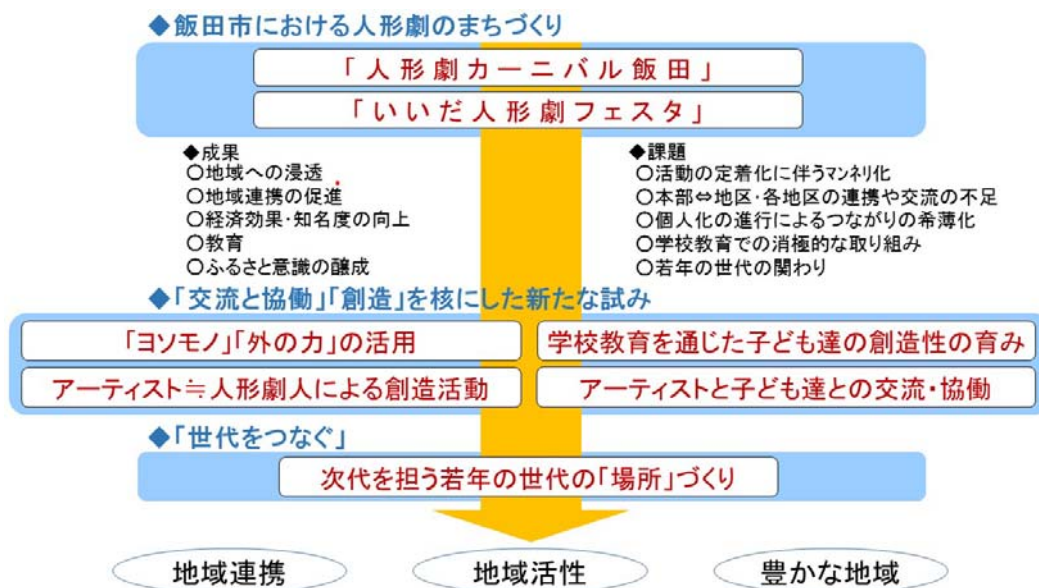


図1 提案の体系図

## 2. 飯田市における人形劇を通じたまちづくりの変遷

飯田市におけるこれまでの人形劇の変遷について、大きく3点の経過から振り返ること、どのようにして人形劇がこの地域に根付いてきたか歴史的背景を検証する。

### (1) 文化的な土壌

飯田市を中心とした伊那谷南部は、他所から伝来された様々な芸能が住民によって享受され伝承されてきた文化が数多くあり、伝統芸能の宝庫としても知られている。現在も300年以上の歴史がある伝統人形浄瑠璃や地域独特な屋台獅子、農村歌舞伎などの伝統が脈々と継承されてきており、そこには地域の住民の芸能活動への盛んな関わりが見られるとともに、外部の文化を主体的に受容し、新たな文化として根付かしていく豊かな土壌があったことが伺われる。

### (2) まちづくりとしての「人形劇カーニバル飯田」の誕生

地域に根付く文化的な基盤について人形劇関係者が注目し、自分たちが集まるお祭りを飯田の地で開催したいという依頼をきっかけに、1980年「人形劇カーニバル飯田」(以下カーニバル)が誕生した。導入当時の市長であった松澤太郎氏は後で「人形劇を媒体として、市民が挙って参加し、ともに楽しみながら互いに連携を深め、共通の目標に向かって行動しうる何か生まれたいだろうか、今にして思えば『地域づくりのための文化的イベント』を想定した」(日本演劇教育連盟1992)と振り返っており、当時から人形劇の祭典を文化行政に位置づけ、まちづくりの手段として考えていたことが伺われる。

具体的には、市民・人形劇人(以下劇人)・行政の三者が一体となってつくる文化運動が目指されたが、当初、市民は観客としての参加が中心で3本柱の1本にはなり得なかった。しかし、青年会議所や商工会などの団体を中心にした活動により、次第に市民に活動が浸透していく中で、観客としてみる側の参加から、祭りを作る側への参加へと形態を変容しつつ、主体的な関わりが持たれていった。

### (3) 市民主体の「いいだ人形劇フェスタ」への移行

カーニバルが飯田の地域で発展するのに伴い、劇人は劇人のためのお祭りを目指す一方で、行政はまちづくりのための文化イベントとして市民を取り込んでいくことを目指す中で、劇人と行政との間に次第に溝ができ、結果的に1998年の第20回を機にカーニバルは突如終了することになる。ここで、カーニバルが飯田市民にとって大きな意味を持っていたと評価する市民が中心となって自主的に話し合いが重ねられていく中で、一年の空白も空けることなく、市民がつくる市民のお祭りとして、1999年に「いいだ人形劇フェスタ」(以下フェスタ)が誕生した。

フェスタは「みる・演じる・支える わたしがつくる トライアングルステージ」を活動の中核におき、観る人・演じる人・祭典を支える全ての人が誰に強制されることなく自由に主体的に関わることを基本理念に、市民の主体性を核にして活動が取り組まれている。また、市民の実行委員を中心に数多くの中高生もボランティアとして関わるなど、市民が中心となり、地域と密接な関わりをもつお祭りとして開催されている。

## 3. カーニバルからフェスタ —地域に浸透した大きな要因—

文化を享受し主体的に取り込もうとする文化的土壌があった飯田市において、カーニバ

ルからフェスタまで36年の長い人形劇を通じた取り組みが成功してきた要因を検証する。

### (1) 地区分散公演

多くの市民が人形劇のお祭りに関わることができるようにするために、市街地はもとより広大な飯田市内全域の様々な会場(学校・保育園・公民館・神社の境内・企業など)で上演が行われている。活動を担うのは各地区の住民で、市内全20地区それぞれに運営を担う地区実行委員会が組織されている。フェスタ2013では、地区公演(本部公演を除く)だけで、81の公演が上演され、12,811人が観劇に訪れ、ささえる立場として2,130人も住民が地区実行委員として運営に関わっており、非常に大規模な住民参加の取り組みとして地域に浸透している。

また、各地区でそれぞれの地域の特色にあったオリジナリティー溢れる独自の企画が住民達によって運営され、地域を巻き込んで活発な取り組みとなることで、地域の連携を深めることにも大きな役割を担っている。

### (2) 参加証ワッペン方式

フェスタ(カーニバル)に参加する場合、観る人も演じる人も支える人も、それぞれが主体的に参加する証しとして、参加証ワッペン(1枚700円)を購入することになる(写真1)。これは、祭りに関わるすべての人がお祭りをつくりあげる参加者として平等に参加費を負担するという趣旨であり、観る・演じる・支える、それぞれの立場の人がともに支え合うことでお祭りが成り立っているということで、フェスタ(カーニバル)が単なる一過性のイベントではなく、文化的活動として地域づくりに起因する祭りであることの象徴ともなっている。



写真1 いいだ人形劇フェスタ 2013  
参加証ワッペン

### (3) 学校人形劇の活動

「人形劇のまちいいだ」を代表する取り組みの柱の1つとして、学校教育での人形劇上演活動＝学校人形劇の活動がある。子ども達が人形劇をみるだけではなく、演じることで美しい心が育まれることを願い、教育委員会が主導となり、平成6年に市内全小中学校に人形劇クラブが設置された。今日までに多くの子ども達が活動に関わっており、フェスタでの成果発表を目標に学校教育で積極的に人形劇上演活動が取り組まれることで、心豊かな子ども達が生まれ、飯田市のまちづくりに貢献している。

## 4. 人形劇を通じたまちづくりの現状

### (1) カーニバルからフェスタの参加状況の推移

年を重ねるごとに確実に規模が大きくなり、国内最大の人形劇の祭典へと成長してきたことが伺われると同時に、ボランティア数の推移からも飯田市を舞台に主体的に人形劇の活動に関わる人が増えてきていることが伺われる(表1・表2)。

表1 数字でみる「人形劇カーニバル飯田」の参加状況 注：第20回は記念大会(期間8日間)

	開催年	劇団数	劇人数	上演会場	上演作品	ボランティア数	ワッペン売上枚数	観劇者数
第1回	1979年	60	381	17	44	※	4,150	※
第2回	1980年	60	313	19	49	※	4,328	※
第3回	1981年	88	524	20	74	※	5,124	※
第4回	1982年	95	618	24	80	※	5,826	※
第5回	1983年	114	651	34	140	※	7,202	※
第16回	1994年	284	1,963	88	239	※	16,413	32,357
第17回	1995年	300	1,837	90	211	※	15,977	31,735
第18回	1996年	301	1,883	88	230	※	14,849	31,276
第19回	1997年	283	1,694	90	231	※	14,867	32,285
第20回	1998年	379	2,421	94	293	※	18,922	51,532

表2 数字でみる「いいだ人形劇フェスタ」の参加状況 注：第15回は記念大会(期間6日間)

	開催年	劇団数	劇人数	上演会場	上演作品	ボランティア数	ワッペン売上枚数	観劇者数
第1回	1999年	264	1,488	92	226	※	14,309	34,614
第2回	2000年	285	1,590	100	282	1,733	13,469	33,936
第3回	2001年	330	1,623	100	269	2,200	13,336	34,800
第4回	2002年	287	1,534	103	252	2,200	12,984	37,980
第5回	2003年	274	1,543	106	275	2,134	13,270	33,381
第11回	2009年	233	1,680	137	404	2,484	14,370	50,039
第12回	2010年	260	1,828	135	453	2,468	13,478	43,838
第13回	2011年	255	1,837	131	467	2,528	13,624	47,575
第14回	2012年	264	1,724	134	447	2,513	12,124	40,025
第15回	2013年	305	1,884	132	509	2,573	13,318	47,033

※：未集計項目

## 5. 人形劇を通じたまちづくりの成果と課題

カーニバルからフェスタに至る現在までの人形劇を通じたまちづくりの取り組みにより、得られてきた成果と現状の課題を明確にすることで、今後より一層、人形劇のまちづくりを通じて、地域が活性化していくために何が必要なのかを模索する。

### (1) 成果

#### ①地域への浸透

カーニバルからフェスタまでの36年にわたる長年の継続的な取り組みにより、飯田＝人形劇のまちと内外から知れわたるようになった。人形劇は飯田市を代表する取り組みとなっており、市民ならば誰もが知っていて当たり前の普遍的なものとして地域に浸透している。また、子供の時にカーニバル(フェスタ)に関わった世代が親となり、自分の子ども達を参加させるなど世代のサイクルがおきてきている。

## ②地域連携の促進

地区分散公演方式の導入により、飯田市全域を通じての開催となることで全市的に地域を挙げての一体的な取り組みとなっている。また、各地区の公民館活動の大きな柱として地区実行委員会の活動が役割を果たしてきており、地域の連携を促進し、地域の絆を深める大切な機会の場合ともなっている。

## ③経済効果・知名度の向上

人口 10 万人の飯田市に 4 日間のフェスタ期間中に市内外はもとより国内外から約 5 万人が来飯しており、地域の知名度アップに大きく貢献している。また、観光客が訪れることで宿泊や飲食など、地域に経済効果ももたらされている。

## ④教育

情操教育に起因するといわれる人形劇について、保育や学校教育と連携して幼少の頃から観て触れる機会を提供することで、子ども達の心の育みの一翼を担っている。

## ⑤ふるさと意識の醸成

学校人形劇の上演活動を通じ、題材に地域の民話や伝統を取り組むことで、地域の文化を学び触れる機会となることや、上演を通じ地区の人々との交流が持たれる中で、地域に対するふるさと意識が醸成されるとともに、地域への愛着が生まれる活動ともなっている。

## (2) 課題

### ①活動の定着化に伴うマンネリ化

36年にわたる長年の継続的な取り組みにより、ささえる体制について運営方法の形が一定程度できあがっているために、逆にマニュアル化された運営に陥ってしまっている面があり、各々が主体的に考え創造性のある活動としての展開となっていない。

### ②本部と地区実行委員会・各地区実行委員会間の連携や交流の不足

自己の意志でフェスタに携わる本部の実行委員と、公民館活動の中で役員として義務的に関わる地区実行委員の活動の目的は違うが、両者が連携し交流する機会がほとんどないため、本部と地区実行委員会の間で二重構造が進んでいる。また、20地区の各地区実行委員会の間においても、地区間で相互に連携し交流することがほとんどないため、自己完結的で他者比較のない取り組みになっており、発展的な展開とはなっていない。

### ③個人化の進行によるつながりの希薄化

平成 25 年度市民意識調査において、隣り近所で助け合い、支えあうことができているかという質問に、「そう思う」「どちらかと言えばそう思う」という前向きな回答は、60 歳代では 84 パーセントある一方、20 歳代では 54.1 パーセントと若い世代になるほど、地域のつながりを感じておらず、地域のつながりが薄くなってきている状況が伺われる。

### ④学校教育での消極的な取り組み

学習指導要領の変更にともないクラブ活動の時間が減少される中で、クラブ活動では人形劇活動は対応できなくなってきた。そういった状況の中で、活動の主体は総合学習での取り組みへと移行してきたが、人形劇の専門的知識がある教諭が少ないことや、人形劇上演活動は台本の構想から人形の制作、上演の指導までと活動のウエートが大きいことなどにより、学校教育の中で積極的な活用とはなっていない状況がある。

⑤若年の世代の関わり

フェスタには、多くの中高生がサポートスタッフとして関わっており、活動の中で地域を知りつつ様々な人と交流を図ることで社会性も育まれているが、一方で、その上の世代の20才前後から公民館役員を経験する前の30代までの世代の関わりがほとんどない。

6. 内部事例として「竜丘地区実行委員会」の活動と、外部の先進事例として「アートによるまちづくり」の事例を検証

(1) 内部の効果的事例の検証 — 竜丘地区実行委員会の専門委員会の活動 —

各地区実行委員会の取り組みは、主として公民館活動として取り組まれており、文化委員会が中心となって役割を担っている。任期は公民館役員の任期にあわせ大半が2年（いいた人形劇フェスタに見る市民文化活動の成果と課題 地区実行委員会に関するアンケート調査：平均2.94年）となることが多いが、竜丘地区では文化委員会とは別に独自に5年任期の専門委員会を設置することで、フェスタなどの文化活動に積極的な取り組みが行われつつ、継続的にまちづくりに関与するシステムができている(図2)。

活動のきっかけ自体は、他の地区同様に義務的な導入ではあるものの、システムとして前任者の活動状況を学びつつ、循環して関わられる体制が構築されていることにより、地域活動を担う役割の大切さや責任を肌で感じつつ、主体的な活動として展開されている。そして、活動の充実から任期を終えた後も公民館活動全般の地域活動に継続的に主体的な関わりが持たれており、フェスタをきっかけに、地域を担う核となるリーダーが循環して育成されている。

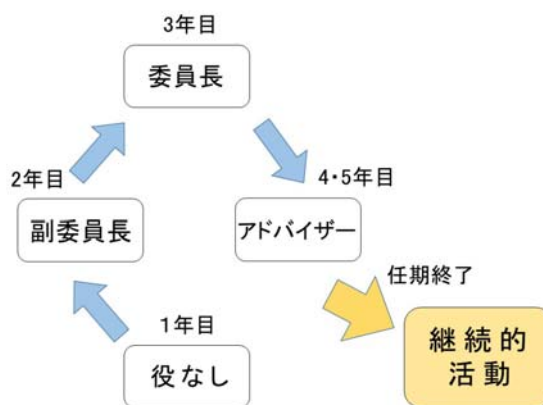


図2 竜丘地区専門委員会の循環図

(2) 外部の先進事例の検証 — アートによる地域活性化 —

①「大地の芸術祭」(新潟県越後妻有地域)

今や現代アートを媒介とした広域連携による地域づくりの先進事例として広く知られているが、活動当初はアートによるまちづくりに対し地域の住民達は、アーティストやその活動に興味をもって都会から訪れる若者達を懐疑的な目で見えており、理解は得られていなかった。しかし、状況打破のために組織された首都圏の学生を中心とした自主的なサポーター組織「こへび隊」による純真無垢で熱意のある取り組みにより、住民の気持ちは「衝突・困惑」から「理解・協働」へと次第に変化していき、住民達と相まっつの協働が生まれていった。

②「アーティスト・イン・レジデンス」(NPOグリーンバレー 徳島県神山町)

アーティストと住民の交流を通じて、新たな作品や新たな価値を生み出す取り組みだが、神山町では特にアーティストの滞在に重きを置いており、人々との交流に恵まれることの少ない地域の住民達がアーティストとの交流を通じて、新しい発見や新しい価値観、新し

い交流が生まれることで、地域活性化が図られていった。

## 7. 人形劇のまちづくりの今後の展望

### ～「交流と協働」「創造」を核にした人形劇の展開～

本レポートでこれまでに確認してきたように、飯田市民にとって誰もが飯田＝「人形劇のまち」と発想するまでに人形劇の営みは地域に浸透しており、地域に根付く公民館活動とも相まることで市民にとって大きな役割を果たしてきたことが伺えた。一方、地域によっては当たり前になったが故に活動自体のマンネリ化による主体性の欠如や地域間での連携・交流不足のために発展的な取り組みとなっていない現状が見受けられている。

そこで、本章において飯田市の人形劇を通じたまちづくりが、さらに発展し効果的な活動として営まれていくために「交流と協働」「創造」を核に新たな試みを提案するとともに、あわせて世代のつながりを深めていくことで、市民それぞれがまちづくりに主体的に関わり、結果として地域の結びつきが増し、地域が活性化されていくことを目指す。

#### (1) 提言1：「ヨソモノ」「外の力」の活用

竜丘地区実行委員会のように市内全20地区において、フェスタの活動を通じ地域に核となる人材のサイクルが生まれつつ継続的・主体的な地域活動へと発展し、地域が活性化されていくことが望まれるが、多くの地区では主体的な活動とはなっていない状況が見受けられている。また、客観的にみれば非常に効果的な活動と考えられる竜丘地区実行委員会の活動も、地域外との交流がないため、あくまで内輪の活動として展開されており、関わっている地区の住民にとっては自分達の担っている活動の意義や役割の大きさそのものについての認識が持っていない。また、効果的な活動状況が他の地区へ伝わることもなく、波及効果もない残念な状況にある。

そこで、先に事例検討した、大地の芸術祭の「こへび隊」や瀬戸内国際芸術祭の「こえび隊」の活動を参考に、「ヨソモノ」「外の力」を活用し、地域の外の視線と力により、客観的に活動が見つめ直されることを通じ、本部⇄地区・地区⇄地区、それぞれに交流や協働が図られることで、地域の連携を高め地域の絆を深めていくために2点を提案する。

1点目は、飯田の地域を題材に数多くの学生達がフィールドスタディのために飯田を研究に訪れている点に着目し、フィールドスタディの学びの延長線上の実践活動の場として、フェスタのボランティア活動を位置づけ、外部組織としてボランティアを編成する。フェスタ期間中、本部・地区に関わらず横断的に積極的に関わることで、外からの視線を導入しつつ、相互の評価を住民に伝え、刺激を与える役割を担ってもらう。最終的には、他者評価として自分達の活動についてボランティア対象の報告兼交流会を開催し、発表してもらうことで、地域をつなぎつつ、個々に刺激を与えていく機会とする。

2点目として、専門的な研究が深くされてこなかった、飯田市のこれまでの人形劇への取り組みについて、外部からの視点や客観的な評価を取り入れることで、確かなものとして確立し、さらなる効果的な活動として展開していく。具体的には、「学輪IIDA」(地域からの情報発信力や問題解決力を高めることを目的に大学・研究者同士が飯田を起点に相互につなぐ有機的ネットワーク組織)の活動を核に地域と大学や研究者が連携を図りつ

つ、外部から人形劇の取り組みを研究することで、客観的な評価を取り入れていく。また、取り組み結果を随時、フィールドスタディの運営にも連携し反映をさせていくことで、より効果的な活動として展開していく。

### (2) 提言2：アーティスト⇄劇人による創造活動の展開

フェスタで劇人は「みる えんじる ささえる」トライアングルの“えんじる”立場として1つの大きな柱に位置づけられているが、現在の活動状況をみると柱とはなりえておらず、住民とアーティストが協働した創造ある展開とはなっていない。原因としては、カーニバルでは「人形劇人委員会」が組織され、委員会を中心に一体となって取り組みが行われることで、劇人主催の企画が次々と発案し実行に移され、創造性あり魅力溢れる人形劇活動へと繋がっていた。しかし、現在の人形劇界ではそういった劇人をまとめあげる組織はなく、また、新たに組織だって活動していくことは厳しい状況にある。

そこで、NPOグリーンバレーのアーティスト・イン・レジデンスの活動にみられるように、アーティストが地域に居住し、地域を題材に創造活動を展開されることで、地域に新たな活力がもたらされてきたことに着目し、飯田版のアーティスト⇄劇人による創造活動を展開することで、劇人による主体的な活動を呼び起こしつつ、あわせて地域との交流・協働を図っていく。

具体的には、全国のプロの劇人に対し、市民が集まる場である「公民館」を拠点施設として住み込みでの創造活動への参加について募集し、アーティストによる人形劇の創造活動を展開する。参加条件としては、①公民館を核に地域と協働の創造活動を展開する。②地域を題材に創造活動に取り組み、成果をフェスタで発表する。③地域の学校と連携し、学校人形劇のアドバイザーを担う、3点を条件にする。活動は、人形劇が観客相手の上演活動という性質上から移住ではなく、フェスタからフェスタまでの期間限定で開催する。成果発表の前年の地区公演へゲストとして参加することをきっかけに創造活動を開始し、翌年のフェスタで活動の成果を拠点地区及び全体会として飯田人形劇場で発表することで、地域や飯田市に還元をする。

### (3) 提言3：学校教育を通じた子ども達の創造性の育み

学校人形劇について、活動に関わった教諭達を対象としたアンケート結果から、大きく4点の効果が検証されている。①お互いに支え合い協力していくことの大切さを知るとともに、課題にぶつかった時に主体的に問題解決に取り組める力が育まれる。②地区の伝統や文化を題材にフェスタや地区の文化祭など様々な場で発表を経験することで、地域の人達をはじめとした様々な人達との交流が生まれる。③人形を通じ間接的に表現することで、表現力や考える力が育まれる。④自分達の発表をたくさんのお客さんにみてもらい喜んでくれている姿をみることで、達成感を味わうとともに、人前で発表をできたことで自信がつく。つまり、子ども達の個々の力の成長面からは、コミュニケーション能力・表現力・創造力・発想力などが育まれること、学級運営の面からは、協働活動の実践により連帯感や他者を思いやる心・団結力が養われるなど、非常に大きな成果があることが判明している。

一方で、活動の主体がクラブ活動から総合学習に移行する中で、人形劇の上演活動は総合学習では負担が大きいことや指導を担当する教諭に人形劇の専門的知識がないことが多



いことから、学校現場で積極的な活用となっていない。飯田市では、指導教諭の負担を軽減しつつ効果的な活動が展開されるために指導教諭対象の指導者講習会の開催や、地元アマチュア劇団による人形劇の相談所を開設するなど、対策がとられてきているが、活動の主体が1年単位で変わるため、抜本的な対策とはなりえておらず、継続的・発展的な活動とはなっていない状況にある。

ここで、今一度、教育委員会を含め学校現場において、何故、飯田市において人形劇の上演活動が全市的に取り組みられてきたのか背景を考えるとともに、現在の学校教育の現場で学級運営を含め人形劇上演活動が果たせられる役割を議論し、明確にした上で効果的に取り組んでいく方法を探していく必要があると思われる。学校現場で人形劇の上演活動を積極的に学校教育に取り入れようという姿勢に変わるからこそ、人形劇がもつ創造性を核に子ども達が成長する姿が多く見られていくのではないか。

#### **(4) 提言4：アーティストと子ども達との交流・協働**

地域の次代を担う子ども達が人形劇を媒介に自分達の住んでいる地域の魅力に触れることで、地域の文化を守り発展的な活動としていくために、各地区を拠点に創造活動をおこなうアーティスト＝プロの劇人と交流し、一流の優れた芸術活動に触れる機会をつくっていく。具体的には、両者が協働活動として展開するために、前述のように創造活動を行う劇人を子ども達(学校人形劇)のアドバイザーとして位置づけ、強制的な関係性を与えていくことで交流を生んでいく。

また、学校人形劇の活動を社会教育とも連動させ、地域の取り組みとして行っていくことにより、発展的な活動としつつ地域の活性化も進めていくために、劇人と子ども達(学校)との関係に加え、保護者や地域の住民を巻き込む形での展開としていく。具体的には、プロの劇人・学校人形劇ともに成果発表の場としてフェスタでの上演を目指して協働活動を行う上で、当初より、地域と活動拠点の地区で両者がジョイントで上演することを位置づけて活動していくことで、地域とも関係性をもたせた活動として展開していく。さらに、地区公演の上演後に開催される劇人と運営スタッフ(住民)との交流会には、子ども達とともに保護者の参加も義務付けることで、三者が運営を支える地域の住民とともに交流を図りつつ、地域を巻き込んでの創造活動として展開していく。

#### **(5) 提言5：次代を担う若年の世代の「場所」づくり**

フェスタでは、公民館役員になったことをきっかけに積極的に活動する40代以上の姿や、学校人形劇やスタッフとして積極的に関わる小中高生の姿が多く見られる。一方で、両者をつなぐ世代である若年の世代(20-30代)の参加は軋しい状況にあり、いかにして若年の世代が人形劇に関わっていくことができるかが大きな課題となっているが、若年の世代の参加が少ない理由は、フェスタに関わる「場所」がないからではないか。竜丘地区の専門委員会の経験者の方々にヒアリングをした時に、「役職を終えた時に引き続き地域活動をしたくても地位や場所がないと続けることは厳しいので、新たにOB組織を作ってしまった。」というお話をお伺いしたが、同じように若年の世代においても関わり合いを持つ場所を作っていくことが必要になると考える。

そこで、若年の世代≡子育て世代であり、子どもの頃の体験を次代につなぐ世代である

ことを考えると、「みる えんじる ささえる」トライアングルの“みる”立場としてフェスタに積極的に参加することにより、経験をつないでいくことこそが重要なのではないか。そのために、各地区で子育て世代をターゲットに人形劇に触れることができる企画や公演を開催することを通じて若年の世代に積極的にフェスタに参加してもらうことで、自然と人形劇活動の中で自分達の「場所」がつけられ、世代をつないだ取り組みとなっていくのではないか。

## 8. おわりに

飯田市を中心とした南信州の地域には、他の地域から伝承された様々な文化を受け入れつつ、主体的に活動することによって、独自の文化として取り入れ継承してきた歴史があり、その過程で文化を媒介として地域に連携がもたらされ、地域の活性化にも大きな役割を果たされてきた。カーニバルからフェスタまでの36年の長年の取組みにより、人形劇は飯田市民にとって、飯田市を代表する活動として認識をされており、ごく当たり前の非常に身近な存在となったことに大きな意義が感じられる。

今後、さらに進む少子高齢化・情報化社会に伴う、個人化の進行によるつながりの希薄化にどのように対応していくかは、日本の国としての大きな課題だが、飯田市においては地域に根づく人形劇を核に取り組むことを通じて、地域の連携を促進させ、つながりを深めていくことで対応可能であると考えられる。

### (参考文献)

- 人形劇カーニバル飯田実行委員会 10周年誌編集委員会(1990)『人形劇カーニバル飯田 10周年記念誌 人形たちがやってくる』
- いいだ人形劇フェスタ 10周年記念誌編集委員会(2009)『つながってく。～人形たちと歩んだ30年～ いいだ人形劇フェスタ 10周年記念誌』
- 篠原匡(2014)『神山プロジェクト 未来の働き方を実験する』日経BP社
- 松崎行代「市民による文化活動成立の文化的要因 -飯田市の人形劇フェスタを事例に-」
- 松崎行代「いいだ人形劇フェスタに見る市民文化活動の成果と課題」
- 松崎行代「飯田市における文化行政とまちづくりの変遷 -人形劇フェスタを中心に-」
- 日本演劇教育連盟(1992)『地域ネットワーク』晩成書房
- いいだ人形劇フェスタ地区実行委員会(2014)「2014人形劇フェスタ取組み報告」
- 飯田市「平成25人材の定住・交流の促進に向けた事例調査～定住自立圏の形成を目指して～」
- 平野真(2011)「アートによる地域活性化～新たな地域経済創出への方法論として～」四国経済連合会
- 飯田市「平成25年度市民意識調査」
- 「いいだ人形劇フェスタホームページ」<http://www.iida-puppet.com/index.html>